

## ドラマ「半沢直樹」に見る日本の金融業の遅れ

名城大学 教授 雑賀憲彦

数年前に大ヒットしたドラマ「半沢直樹」が復活するようだ。主人公の半沢直樹が悪い上司の策略に陥れられそうになるのを、同期の仲間など周囲の人間に助けられながら、「倍返しだ！」と叫びながら仕返す痛快ドラマである。それは、まさに日本の大手銀行の組織体質を見事に表した「人間関係のドロドロの内容」だから、多くの人が共感したのではないか。

ドラマは素晴らしいのだが、**情けないのはそこに描かれている日本の金融業を代表する銀行の組織体質である**。出世のためなら取引業者と内通して不正を働いたり、他人を蹴落としたりしてまで出世のことを考える自己中心の支店長や本店の部長以上の管理者が存在していたということである。そこに、このドラマが日本の銀行の典型例を表したという意味で、視聴者の共感を得たとすれば、一体銀行のトップは何をしていたのかと問いたい。

それだけではない。日本の銀行を中心とした金融業はやはり世界的に見て遅れているのである。現在「フィンテック」という financial と technology を合成した言葉で金融業界の再編が行われているところであるが、それはITを業務に取り入れて効率化を図る動きであって、窓口の人間を減らすだけでは不十分なのである。日本の銀行を中心とした金融業は国内市場だけでビジネスを展開しており、海外にはほとんど進出できていないのである。つまり「井の中の蛙」の状態であるのだ。それは規制に守られた農業や漁業などと同じで**親の庇護のもとで戦いに参加していない「お坊ちゃま産業、甘ちゃん産業」**ということである。昔は銀行と言えば、真面目で堅い仕事で給料も高いということで結婚相手No.1の職業と言われていた。しかし、蓋を開けてみれば、組織体質が暗くてドロドロしていて、世界的に見て遅れた産業ということでは、地に落ちたものになってしまった。

では、どうすれば良いのか。**世界に打って出るのである**。私が研究している世界の生産性の高い国を今までにも紹介してきたが、シンガポール、香港のアジアの小国、ルクセンブルグ、デンマーク、ノルウェーなどの北欧諸国がなぜ日本よりも1人当たりの所得が高いのか、なぜ生産性の高い国となっているのか。その答えはいずれもの国が金融で儲けているからである。近隣諸国の銀行の役割を果たしているのである。シンガポールは南アジアの銀行の役割を果たし、ルクセンブルグはEUの銀行の役割を果たしている。日本の銀行がアジアの中心国としての金融を牛耳っているかと言えば、そんなことはほとんど出来ていない。アジア開発銀行は日本とアメリカが共同で作ったようだが、今は中国の作ったAIIB銀行のその顧客や仕事をほとんど奪われてしまったようだし、石油産出で金持ちとな

ったアラブ諸国にも日本の銀行が関与しているという話はほとんど聞いたことがない。

日本の大手銀行は世界の大都市に支店を持っているかといえば、情報収集のための出張所を持っているに過ぎないのである。これでは「井の中の蛙」から抜け出ていないのではないか。

世界と戦って勝てる金融商品は何か、世界を相手にどんな金融サービスが開発できるのかなど、フィンテックの現在だからこそ停滞している国内市場から脱却して世界に視野を向ける商品の開発がやり易いはずである。またそうしなければ日本経済に貢献しない金融業に成り下がってしまうのではないか。もちろん商品開発は簡単でない。それならば日本の銀行はシンガポールや香港、ルクセンブルグ、ノルウェーなどを研究しに行くことも必要ではないだろうか。(1440 文字)

以上